

# 生涯スポーツにおける中高年者の国際競技大会について

塩 満 勝 麿

(武庫川女子大学文学部教育学科)

## An International Athletic Meeting of the Middle Aged and the Old Aged for Life Sports

Katsumaro Shiomitsu

Department of Physical Education

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

### 緒 言

近年になって、日本人の平均余命において、特に寿命の伸びは著しいものがある。人生50年の時代から人生75年の時代になっている。又、国際的に比較しても驚異的で、1989年の簡易生命表をみると、男女共に世界のトップになったと言える。厚生省発表によると、日本は昭和63年度男性75.54歳・女性81.30歳となって、2位のいずれもアイスランド男性75.04歳・女性80.38歳を従えて、世界の最長寿国になったと言える。

終戦直後の昭和22年に、寿命は男性50.06歳・女性53.96歳であったのが、医学・薬学の進歩、栄養の向上等で寿命は大きく延び、戦後41年間で男性25年・女性27年も長生きするようになった。寿命が長くなった事は人生が長くなった事で、特に定年退職後の生き方が問題になってくる。生活において肉体面の充実、精神面の充実がより強く要求されよう。又、その辺の事情を意識して、その前段階中高年層も影響されて心身両面の充実、健康度の獲得といった事が次第に実行に移されている。

これらの要求をもった階層の獲得をねらって民間の企業が先行して、「健康産業」と呼称されて、国民大衆のニーズを掴むべく各種の施設を充実させて発展段階にある。今後これらの施設は、ますます競争林立すると思われる。

運動競技を通して生涯体育に取り組む人々も数多く、健康・体力面の充実から更に競技力向上にエスカレートして、これらの人々は権威ある競技大会で腕だめしをしたいと考えるようになる。組織だった競技協会のもとに記録を競い、選手権を競うといった形をとっている。大会の規模は、居住地域の大会から発展して全国大会といった組織も整っている。現在では更に発展して、国際大会も企画され定例的に開催されるようになっていく。国際的な催しになると単に健康問題の意識の高低のみならず、金銭その他の問題も大きく関係してくる。それらの事情も探るべく、アジア地区を対象に実施された中高年者の競技会である、アジアベテランズ陸上競技選手権大会について調査してみたい。

### 調査の内容

調査対象…第5回アジアベテランズ陸上競技選手権大会

調査期日…昭和63年〈1988〉12月3～5日

調査場所…台湾 台南市総合スタジアム

競技要項…女子35歳・男子40歳以上の者

女子は35歳以上5歳きざみで、75歳以上一括。

男子は40歳以上5歳きざみで、80歳以上一括。

競技種目…100m, 200m, 400m, 800m, 1500m, 5000m, 10000m, 400m R, 走幅跳, 走高跳, 三段跳, 砲

丸投, 円盤投, 槍投

男子種目…110m H, 400m H, 1600m R, 棒高跳, ハンマー投

女子種目…80m H

## 結果と考察

### 1. 参加国

インドネシア, インド, 日本, 韓国, マレーシア, フィリピン, 中華民国, シンガポール, スリランカ, タイ

アジア地域と言えども数多くの国々があるが, 10ヶ国しか参加していない。この他に, 参加の意志を表示していた国に香港があったが, プログラムに記載されていたもの実際は不参加であった。

中高年者の競技大会といった類の催の始まりは比較的最近であって, 国際大会として二年に一度開催されるアジア大会が, 過去四回催されている。更に規模を大きくした世界ベテランズ陸上競技選手権大会が, 歴史も長く過去七回開催されている。世界大会の方も二年に一度開催されて, アジア大会と交互の年に開催される形である。

若人の祭典オリンピック大会の参加と比較して考えると, 不参加の国々の方が多しである。各国における健康観の問題, 人生観・食糧事情・経済力等数多くの問題を含んでいると言える。

アメリカ・ヨーロッパ各国に比べて, 国内的に後進国と言われるアジア諸国において, 中高年者の問題まで手がまわらないと言うのが実情かも知れない。中高年者と言えば, 社会的活躍において第一線にあり, それぞれの職場で責任ある立場の人も多くて, 責任上長期間仕事から離れられないのが現状であろう。又, 選手個人は家庭があるわけで, 一家の主人として主婦として大黒柱として, 仕事中心で家庭を守っているわけである。生涯体育・スポーツといった類にどの位の時間を費やせるのか, どの位の金銭を費やせるのかといった生活力・経済力の問題も大きいと思われる。最も取組が進んでいるとみて良い日本でも, 過去のスポーツ経験者が皆参加するものでもなく, 活動に価値を見出している一部の人が参加しているにすぎない。経済的に豊かになったとよく言われている日本でさえ, もっとこの種の行事が盛んになって欲しいと, 国内のこの種の行事を継続調査して思うのである。アジア各国も経済的に発展し国力の安定をみせて, 人間性を回復・助長するようなこの種の行事も盛大に実施・参加できる状況になって欲しいと思う。

### 2. 参加費用

大会参加者にとって, 交通費・宿泊費等は大きな負担である。特に国際大会であるが故に, 交通費は大きな出費であろう。この費用が負担できないと, この催しを理解し競技力があっても参加できないのである。社会生活を営んでいく上において, 生涯体育・スポーツに対する出費が, 家計を圧迫するようでも困る。

どだい, この種の催しで国際的な規模までの大会の実施の必要性も問題となろう。男性であつたら長期間職場を離れる問題と, 多額の出費の問題もある。女性にとっても長期間家庭・職場を留守にする事, 又多額の出費もある。これ等の事を犠牲にして, 大会にどこまで参加できるかといった根本的な問題がある。経済的・時間的な負担を少なくした国内的競技会を盛んにして, 生活に犠牲を伴う規模の国際大会まで実施しなくてもよいといった見方もある。

ただし, 競技者としたらあくまで高いレベルを求めるから日常の活動が実施できるし, ましてや国際大会といった大きな刺激が, 日常の家庭生活において大きな張合いにもなる。国際大会の場を設定する事は良いとして, 大会参加の意義は競技者の自覚によると思われる。大きな犠牲を払う事もなく, 何時も参加する必要もなく, 時間と金銭が許せる状況になったら, 競技力向上としてレクリエーションとして又他国民との交流といった事, 勿論新しい見聞を広める事を考えて参加すればよいと思う。

表1では, 台湾の台北空港を中心とした各国からの航空運賃で, 片道の費用を示してある。各国選手団においては, 台湾における国内周遊の形もとったりするので, 各国選手団の費用の厳密な意味の比較は難しい。単なる往復であつたら割引等もされる。従つてここでは, 各国と台北間の片道の航空運賃を出し, それを日本円に概算したものである。物価・経済力の問題もあるので数字だけでは単なる比較はできないが, 大まかな目安

Table 1 Airplane Fare (¥)

フィリピン	台北	マニラ	33,000
韓国	"	ソウル	45,000
日本	"	大阪	59,400
タイ	"	バンコク	68,000
シンガポール	"	シンガポール	90,000
マレーシア	"	クアラルンプール	"
インドネシア	"	シンガポール 経由 ジャカルタ	99,000
インド	"	バンコク 経由 ニューデリー	115,000
スリランカ	"	コロンボ	120,000

となろう。アジア地域での大会といえども、費用は決して安くはない。台湾と割合近い位置にある日本にして航空代が高い負担と思う位であるから、他の国々の感覚はまだまだ大変な負担と思われる。

尚、単なる競技会参加に終わらずに、この機会に観光コースも取り入れる事が考えられる。日本選手団も競技会終了後一日

の観光を組入れている。大会期間中も出場種目の有無によって、途中の観光も有りといった形である。

〈日本選手団標準費用11万円〉

- 12月2日 日本各地より台北へ
- 3日 } アジアベテランズ陸上競技選手権大会
- 4日 }
- 5日 }
- 6日 観光 故宮博物院又は花蓮コース
- 12月7日 帰国

折角の機会でもあるし、外国に行ったのだから自分の競技が無い日に観光するなど、目的もそこまで広がるとより楽しいものになるであろう。

### 3. 国別参加者

この数値は、各国における中高年層のレクリエーション・スポーツ活動実施についての、理解度を示しているように見受けられる。反面に外国遠征といった事を考えると、前述の如く経済力といった問題も大きく影響していると思われる。

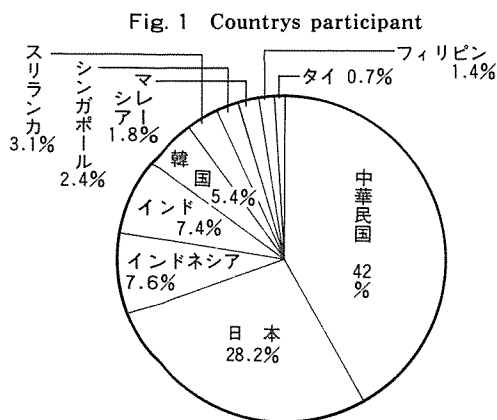


表2は競技会に実際に参加した人数である。国際大会といった性格上その準備も早くから進めておく必要があるの、大会参加の申し込み締切りは約3ヶ月前になっていた。参加の意志表示をした人は当然多かったわけで、全体で731名であった。参加申し込み期日後大会当日までに、健康上の問題とか仕事上の都合とか家庭の都合上とか種々な要件があって178名が参加不能となり、結局参加申し込み者の75.1%にあたる553名の参加があった。

国別では開催国地元の中華民國が最も多いのは金銭的条件を考えると当然で、全参加者の42%にあたる。金銭的負担が少なく済む上に、参加日数も少なく済むなど地の利が大きかったと思われる。

続いて参加者の多いのが日本で28.2%である。外来国で以下の国々が少ない参加状況を見ると、日本は際立って多いと言えよう。簡易生命表を基に発表された1988年

Table 2 Country's participant

	中 民 華 国	日 本	イ ネ ン シ ド ア	イ ン ド	韓 国	ス ラ ン リ カ	シ ボ ン ガ ル	マ シ レ ア	フ ビ イ リ ン	タ イ	計
男 子	165	134	26	26	22	13	7	8	6	1	408
女 子	67	22	16	15	8	4	6	2	2	3	145
計	232	156	42	41	30	17	13	10	8	4	553

度の平均余命で、寿命は男子・女子とも世界一の数値を示している。それだけに、健康問題や老後の人生など一層切実になってきていて、生涯スポーツに対する理解・関心が非常に高いとみる事ができる。又、それを実行するための経済的な裏付けも伺う事ができる。日本は開発途上国の経済的援助も実行できる状況にあるので、生涯スポーツ・健康産業といった面での援助も考えていっても良いであろう。例えば指導者養成、機器の開発援助、施設・設備の援助、人材交流、実態調査等が考えられる。又アジア諸国において日本は台湾に比較的近いので、航空運賃も他国よりは安い負担が軽く、沢山の人が参加できたのであろうと思われる。

以下大きく離れてインドネシアの7.6%、続いてインドの7.4%であった。インドネシアは参加予定者の95%が参加して、参加率では際だっていた。インドは申し込み者のうち半数の参加者であった。これに続くのは、第24回ソウルオリンピック大会を9月に開催したばかりで、スポーツ関係の諸行事には積極的と思われた韓国が5.4%で、これは申し込み者の66%が参加していた。スリランカが申し込みより大部減って38%の人が参加している。以下フィリピン・タイと続いている。タイは初参加であるそうで、このような大会に手探りの状態であろう。これを契機に海外の事情を掴み国内での発展が望まれる。以上の他に香港から男性1名が参加の予定であったが、実際には不参加であった。各国間の交流の点において非常に残念であった。国内的にも充実して、諸外国と交流をもち大いに情報交換して欲しいものである。

このような参加の状態は、国の経済力、国民の生活力が大きく影響している。外国旅行ができる経済力がないと参加できない。日常生活において、人間が生きていく上での必要条件衣・食・住が満ち足りて、はじめてレクリエーション・健康といった面に気を使う余裕ができる。

我が国において選手権を目指す若い現役選手以外の一般市民が、楽しみのため・健康のため・交友のために、スポーツに勤しんで汗を流すといった風潮の大きな兆しは、昭和39年(1964年)東京で開催された、第18回東京オリンピック大会を契機にしているように思われる。経済力向上と相俟って、スポーツが身近なものとしてとらえられるようになったのであろう。健康産業と言って体力・健康の維持増進のために、金銭を使って実施する企業が成立つようになったのも耳新しい事である。健康・体力の維持増進のために、一日の生活時間の一部を割いてスポーツにあてる。意識が高まって更に高い段階で競技力の向上を願うようになる。関連して食生活の改善といった健康問題について、どの程度の認識があるのかといった事がスポーツの実施に関連して、延いては大会参加者の多少に影響してくると思われる。

中華民国選手団・開催地の台南市民に聞いた話では、最近になって一般市民の活動力の充実を願う気運が高まってきて、又中高年者が身体活動の実施の模範となるべく、率先して若い人々に良い影響を与える事を考えているようである。以前中華民国は「東亜の病夫」と諸外国から言われたそうで、阿片に溺れて麻薬中毒で見る影もない病的な身体になっているのを指摘されたそうである。健康問題に目覚めてきた事に合わせて、5・6年位前から「強身」といった意図も加わって、身体活動を一つの趣味として全民運動といった狙いで、健康・体力向上を大いに図っているそうである。一般市民は朝が早起で、1・2時間身体を動かしてから仕事に行く習慣がある。早朝の公園では太極拳舞をよく見かけるし、公園に数多く球技コートが描いてあったのも印象的であった。

他のアジア諸国については、言葉の障壁上中高年のスポーツ活動に関して真意を掴めなかったのは残念である。しかし競技会参加者の身体をみて、良く均整のとれている事、表情の活気的な事を考え合えると、健康問題に意欲的である事が窺える。日本人にとって肥満問題が日常茶飯事となった現在、スリムと表現して良い均

生涯スポーツにおける中高年者の国際競技大会について（塩満）

整のとれたアジア諸国の選手をみて、日本が大いに反省しなければならない点であると痛感する。

今度の競技会で、大会を象徴する存在で話題になったのが、中華民国選手で93歳の男性である。参加者中最高齢者であるが、日本人男性の平均寿命75歳と比べると驚きである。持病があって、寝込んでもおかしくない年齢である。「自分の身の廻りの事は、生を終えるまではできるだけ他人の手を煩わさず自分自身でする」といった御手本であろう。長寿も立派であるが、この年齢で長旅ができる事、更に競技が出来る事を考えたら驚異的である。

4. 種目別参加者

Table 3 Event age participant (man)

計	年 齢	百 M	二 百 M	四 百 M	八 百 M	千 五 百 M	五 千 M	一 万 M	走 幅 跳	三 段 跳	走 高 跳	砲 丸 投	円 盤 投	槍 投	ハン マー 投	棒 高 跳	百 十 H	四 〇 〇 H
96	40	13	8	14	6	9	7	5	6	2	2	2	3	6	1	2	4	6
93	45	12	13	5	3	4	4	7	5	5	2	9	5	9	4	1	2	3
126	50	11	9	7	6	8	8	7	9	7	6	11	11	8	6	3	5	4
114	55	15	12	10	9	11	9	7	9	6	10	4	6	6				
118	60	14	10	9	7	9	8	12	6	10	10	6	10	7				
103	65	16	9	7	4	9	8	7		6	7	8	12	10				
111	70	12	9	11	6	10	7	3	9	6	5	12	12	9				
79	75	9	8	5	4	5	3	2	8	6	6	5	7	11				
27	80	3	3	4	1	1			2	1	1	4	4	3				
867	計	105	81	72	46	66	54	50	54	49	49	61	70	69	11	6	11	13

男子においては、100m走が最も多くて群を抜いている。現代社会の風潮で、運動不足のための身体活動として、ランニング・ジョギング・ウォーキングがもっとも取付きやすく、その延長で中・長距離種目の参加者が最も多いのではないかと思ったが、予想外の結果であった。100m走に続いて200m・400mの順で、短距離走が最も多い。ランニング種目は先ず特別に用具が要らない事、トレーニング場所も正規なグラウンドのみに限らずに、容易に場所を変更したりして実施しやすい等の特徴があるので参加者が多いのであろう。一人数種目出場すると関連ある種目になるので、同系統の種目の出場者はほぼ同様の参加状態であろう。

続いては投擲種目が多くて、円盤投・槍投・砲丸投の順であった。投擲競技は用具を使う事で練習場が固定される難点がある。その上に危険性を伴う事を考えたら、参加者の多い事が予想外であった。ただ投擲用具の規格は一定ではなくて、年齢の進むに従って軽減されている。特に加齢といった身体的条件を考えて、身体的負担・故障等に配慮されている事は、大会の目的に合致して合理的である。これらの点は高齢者になっても安心して実施できる条件であろう。

続いて中・長距離種目であるが、1500mが最も多く5000m、10000mの順で、800mが最も少ない。中・長距離種目は競技時間が長く運動量が多い。それ故に身体的故障も考えられるのであろうか。日本国内において健康マラソンといった類のもの、市民ロードレース等の数千人単位の出場者をみると、もっと多くの参加者があってもよいのではないと思われる。それ故に各競技者にとって、競技参加の機会中は中・長距離選手が確実に多いのである。尚大会の実施時季は、日本に比べたら残暑から初秋といった感じであり、湿度は低く長距離

種目は昼の日射の時間帯を避けて夕刻実施されていた。

跳躍種目の参加者が少ないのは、ある程度頷ける。体力の低下に反して、体重は増加傾向で腰部脚部への負担は非常に大きくなる。当然故障も伴ってくるのである。投擲競技の様に軽減の方法が無いのも難点である。

その他に、400mH、110mH、ハンマー投、棒高跳は最も参加者が少ないのであるが、用具の大変さを考えたら競技人口の少なさが納得できよう。

Table 4 Event age participant (woman)

計	年 齢	百 M	二 百 M	四 百 M	八 百 M	千 五 百 M	五 千 M	一 万 M	走 幅 跳	三 段 跳	走 高 跳	砲 丸 投	円 盤 投	槍 投	八 十 H
47	35	5	6	4	3	4	4		7	2	5	2	1	3	1
52	40	5	4	6	8	6	3	2	4			5	5	4	
69	45	9	6	4	1	2	4	1	8	2	4	6	11	8	3
59	50	9	8	5	2	2	2	1	4	3	3	7	7	6	
49	55	6	5	2	3	2	2	0	5	2	4	6	8	4	
37	60	1	2	1	1	4	3	1	3		2	4	7	8	
13	65	2		2			1		1			2	4	1	
15	70	3	1		1				3			3	2	2	
	75														
3	80				1	1	1								
344	計	40	32	24	20	21	20	5	35	9	18	35	45	36	4

女子においては投擲種目の参加が最も多くて、円盤投・槍投・砲丸投の順であった。男子の項で述べたように、中長距離種目が多いのではないかと予想していたが意外であった。道具を必要とするなど練習場の固定される事を考えると、不利な条件ながら多いと言える。但しランニング種目比べて脚・腰への負担が少ないため、故障が関係しているのではないかと考える。同様の人数で短距離種目100m・200mで、少し減って400mである。中長距離種目はほぼ同じで、1500m、800m、5000mの順であった。ハードル種目は4名と、用具の点から考えたら無理からぬと思われる。1500m、5000m、10000mは3日間の大会で各日に一種目ずつ設定されていたが、気温の点から疲労回復・集中力等を考えたら、これらの種目を兼ねるのに強行軍となるかもしれない。

10000mが5人の参加者があったが、所要時間が長く競技会運営の時間を押し広げていたのも事実であった。各年代と一緒に競技すると、周回遅れが出てきてゴール判定に戸惑うなど、運営面に問題を残していると思う。参加者にも国際競技会の運営を考えたら、制限時間か他の制約を考えないと、競技会終了予定時刻が大幅に遅れている。現行では、参加意志がある者は皆平等に参加できるシステムで良い主旨であるが、反面大きな問題点でもあると思われる。

三段跳は現役選手にとっても、女子種目として実施されるようになったのは、ここ数年である。中高年者にとっては経験も手本も全く無いわけで、新しい事に挑戦していく開拓精神は立派である。

### 5. 年代別参加者

男子の参加者を見ると、50歳代が群を抜いて多い<sup>1</sup>。続いて55歳代60歳代が多いのが特徴で、50～65歳代に続いて40・45歳代と中年者になっている。

## 生涯スポーツにおける中高年者の国際競技大会について（塩満）

Table 5 Country, age participant

男子 女子 計	計	国 年齢	イ ン ド ア	イ ン ド	日 本	韓 国	マ シ ン レ ア	フ ビ ン	中 民 華 国	シ ン ポ ン ガ ル	ス ラ ン リ カ	タ イ
22	22	35	1	4	2	1		1	9	2		2
53	75	40	6	4	9	1	3	2	21	3	3	1
22			4	3	2	3	1	1	4	3	1	
49	77	45	5	6	11	2		1	20		4	
28			2	3	4	1	1	13	1	2	1	
67	88	50	7	8	20	4	1		26		1	
21			4	4	6			6		1		
55	73	55	1	5	14	4	2	1	19	4	5	
18			4	1	4	1		8				
55	72	60	3	1	22	4	1	1	23			
17			1		2	1	13					
53	63	65	2	2	17	6	1		25			
10					1	1	8					
38	44	70	1		21	1		1	14			
6					1		5					
30	31	75			16				14			
1							1					
8	8	80	1		4				3			
408	553	計	26	26	134	22	8	6	165	7	13	1
145			16	15	22	8	2	2	67	6	4	3
			男子	女子								

一般的に考えて、若い年代の参加者が多くて年代が進むに従って減少するのではないかと予想したが、意外な結果であった。50歳代から最も多いのは、人生経験・生活の余裕・精神的余裕などによるものであろうか。70・75歳代の参加者も結構多い。日本で考えたら平均寿命の年代である。その様な年代で五体健全で、病気や怪我が無く、自分の事は自分でやれる事が立派である。そのうえに、運動競技が出来る事などは羨ましい限りである。80歳の参加者から急に減少している。体力的な事、健康の問題もあるであろう。特に旅費等の負担は大きな障害であろう。しかしその参加意欲は立派なものである。

女子の場合は様子が少々違っている。45歳代の参加者が最も多くて、35・40・50・55・60歳代と続いているが同様な人数である。女子の参加者は、全体の26%と男子に比べて263人少ないが、家庭における役割家事・育児等を考えたら無理も無い事であろう。その様な条件のもとに、これだけ参加できる事は望ましい傾向にあると思われる。女子の場合35歳代までは育児に手が取られると思われるが、さらに45歳代までは一般的に家事に追われる事を考えたら、最も参加者が多いのに驚かされる。家庭において家事・育児と、競技の両立がどの様になっているのか知りたいところである。家庭における理解も大切で、これからの家庭生活の有り方を示唆するものがあるかも知れない。65歳代から急に減少して、70歳代ではさらに半減している。体力年齢的なものも

あるであろうし、又経済的負担も大きいと思われる。75歳代以上に1名の参加者があったが、参加種目は800m, 1500m, 5000mで、気力・体力とも感心させられるものがある。

## 6. 成績

Table 6 Result

	1位	2位	3位
日 本	115	68	63
中 華 民 国	67	66	59
インドネシア	16	22	19
スリランカ	7	7	10
シンガポール	6	3	5
イ ン ド	5	21	11
韓 国	4	10	3
マレーシア	2	2	2
フィリピン	1	1	1
タ イ	1	1	1

参加者数からみたら、地元中華民国を逆転して、日本は傑出した成績である。日本の競技力もさる事ながら、早くから中高齢者のスポーツ活動に目覚めている事等の背景が、大きく影響していると思われる。地元中華民国は参加者数が最も多いのだから、ある程度の好成績は考えられた。中華民国の競技者や観客の一般市民に面談した内容でも、良い意味で健康に目覚めている事が伺えるので、納得のいく好成績である。日本の中高年者の競技力が飛び抜けた存在である事が解った。今後は他のアジア諸国への援助といった、リーダー的意識を強くもつ必要があると言える。

## 要 約

中高年者が常に懇願している事の1つに、体力・健康の維持増進がある。その実現のために、生涯体育・スポーツの実施に取り組んでいるのである。一時期に集中するよりも、継続して長期間実施する事に価値がある。高齢になるほど取り組みにくい面もあるので、若い時から取り組んで馴れていると

継続しやすい。その一手段として陸上競技も愛好されているわけである。公的な機関のもとで、記録・順位を競うようになり、さらに外国での腕試しえと発展している。その様な延長線上で開かれた第5回アジアベテランズ陸上競技選手権大会を分析すると、参加は10ヶ国と少なかった。国内の機運を盛上げて参加国が増えて欲しいものである。

国別の参加人数の多少は、国の経済力が影響していると思われる。開催地の中華民国に続いて日本が多く、外来国では日本が断然多い。

種目別参加者の統計は種目の愛好者の多少が伺う事ができる。男子では短距離・投擲・中長距離・跳躍の順で女子は投擲・短距離・中長距離・跳躍の順であった。

年代別参加者数を比較すると男子は50歳代が最も多くて55・60・65と続いてから若い40・45歳代となっている。70歳代の参加も結構あり、80歳代から急に少ない。女子は45歳代が最も多く、この年代を中心に35～60歳代まで同様な人数である。65歳代から急に減少している。各国の成績をみると日本が断然傑出している。参加者数の最も多い中華民国が続いて、両国以外は参加人数が少ないので当然入賞者も少なくなっている。出場者数からみたら日本・シンガポール・スリランカ・インドネシアが良い成績と言える。現在の状態では豊かな国で大会があったら極端に成績が片寄る危険性がある。奨励の意味でも当分は日本以外で大会を開くのが良さそうである。

以上の事情が解ったが、これらを踏まえて、健全な大会として発展して欲しいものである。

## 文 献

1. 塩満勝磨, 二宮恒夫 第38回日本体育学会号 119頁

(1989年9月27日受理)